

【論文】

住民による子ども博物館運動に関する研究 (1)

— 「京都子ども博物館」の例より —

The study on the Movement for Establishing a Children's Museum by Inhabitants (1)
— A case of Kyoto Children's Museums —

西尾幸一郎**・上野 勝代*

Koichiro NISHIO Katsuyo UENO

Abstract

Recently, the movement for establishing a children's museum by inhabitants tend to extend and create a sensation. In order to clear about these movements, this paper report about Kyoto children's museum that one of these movements. The result are as follows; 1)the outline of the movement for establishing a children's museum by inhabitants, 2)children show great favor to this movement, 3)the education of this movement is highly appreciated with parents.

1. はじめに

“大人だけでなく子どもにも楽しめる博物館を”、生涯教育機関としての博物館に関する社会全体の認識の変化から、そのような声がよく聞かれるようになった。その声に応える形で、日本各地に子ども博物館や体験型の博物館等が次々と設置されてきている⁽¹⁾⁽²⁾。また、その他の博物館においても子どもを対象としたワークショップなどさまざまなプログラムが実施され⁽³⁾⁽⁴⁾、それらの新しい博物館の動きはメディアなどを通じて盛んに紹介されている。しかし、その一方で、その対象となっている住民の側の子どもの博物館運動についてはこれまであまり紹介されてこなかったように思われる。そこで本稿では、1995年から毎夏、京都市でボランティアグループによっておこなわれている「京都子ども博物館」の活動をとりあげたい。

「京都子ども博物館」は、欧米の子ども博物館の展示などを参考に自分達で展示品を制作して、それを一般に公開し、日本の子ども達にも子ども博物館

の良さを体験してもらうという目的で開催されている短期間のイベントである。ここで公開されている展示はほとんどがボランティアの手作りによるものであり、各展示に対して専門的な知識をもつようなスタッフもあまり関わっていない。また、京都市国際交流会館から若干の援助を受けているとはいっても、一般の博物館における諸活動と比べるとかなりの低予算で運営されている。しかし、それにもかかわらず、1995年から1997年の開催では毎回6日間でおよそ3000人という利用者が訪れ大盛況であった。また、この活動は遊びの要素が重視されているが、単なる娯楽的なイベントではなく、しっかりと教育的な配慮がなされているように思われる。

なぜ、この「京都子ども博物館」の活動がこのように大きな反響を呼んでいるのか。また、ここで意識されている教育が利用者である子ども達にどのような効果を与えているのか。これらのことについて明らかにするために、その活動の内容、利用者(子ども)の属性や評価、また、ここを訪れた大人達が

* 京都府立大学・教授 人間環境学部環境デザイン学科

平成11年1月9日受理

** 京都府立大学大学院 生活科学研究科

この活動をどのように評価しているのかなどに関する調査をおこなった。これらの内容は、我が国における子ども博物館をはじめ、地域に根差した博物館の在り方を考える上で、多くの示唆を与えるものと考え、以下その内容を紹介していくこととする。

2. 調査の方法

調査としては、1997年に開催された「京都子ども博物館」からボランティアとして実際に活動に参加し、参与観察による予備調査をおこなった上で、以下の2種類の調査を実施した。

(a)活動の記録

ボランティアグループへのヒヤリング及び活動概要より作成。

(b)1998年度「京都子ども博物館」の来場者の検討

大人用と子ども用の2種類のアンケート用紙を作成し、期間中訪問した全来場者を対象としたアンケート調査をおこなった。この際、利用者の中で回答することが困難な小さな子ども達に対しては、同伴の大人に聞き取りによる記入を依頼した。

- ・調査期間：1998年8月19日～8月22日

- ・子ども用アンケート

配布1144部 回収286部（回収率25%）

- ・大人用アンケート

配布592部 回収254部（回収率43%）

3. 住民による子ども博物館運動について

ここで、まず、これまでの日本における住民による子ども博物館運動について触れておきたい。日本の住民による子ども博物館の歴史はまだ浅く、1988年から1993年の6年間、守山市で開催された「守山子ども博物館」⁽⁵⁾⁽⁶⁾が住民による初めての本格的な子ども博物館運動とされている。この運動は“アメリカにあるような子ども博物館を日本にもつくろう”という守山市に住むアメリカ人女性、斎藤スーザンの呼びかけに賛同した主に主婦を中心として構成されたボランティアグループによっておこなわれた。なお、守山子ども博物館のボランティアグループの活動の内容に関しては、西川が『子ども博物館から広がる世界』（1993）の中で詳しく報告している。

この運動では常設の施設建設を実現するために、行政に働きかけながらデモンストレーションとし

て、毎年夏に5～12日の短期のイベントである「守山子ども博物館」が開催された。そのイベントの内容とはアメリカの子ども博物館を参考に独自の解釈を加えて手作りで展示を制作して、一般の子ども達に公開し、より多くの人達に子ども博物館を体験してもらおうとするものである。そして、この中では“子ども達が遊びながら自然に学べるように”という子ども博物館の基本理念が最も重視されている。このような「守山子ども博物館」の取り組みは毎年大盛況で、期間中には守山市など周辺の住民を中心におよそ2000人から5000人の来場者があった。

また、その準備の中でも、独自に講師を招いての学習会やシンポジウムを企画したり、関連施設への訪問・見学をおこなったりと旺盛な活動が展開されている。しかし、残念ながら守山市における常設の子ども博物館の建設は実現せず、この活動そのものも1993年の開催を最後に終了してしまった。しかし、その理念や活動の蓄積といったものは、本稿でとりあげる「京都子ども博物館」をはじめ、その他の子どもを対象としたボランティア活動や滋賀県立琵琶湖博物館のディスカバリールームなど、主に近畿地方を中心とした様々な取り組みに引き継がれている。

4. 「京都子ども博物館」の概要

「京都子ども博物館」は、1995年、以前「守山子ども博物館」でボランティア活動をしていた西川⁽⁷⁾の提案で、中学校教員の町田⁽⁸⁾によって始められた。ボランティアとしては「京都子ども博物館を広げる会」代表の町田が中学校の教員であること、もともと子供会活動や親子劇場に関わっていたことから、中学から高校の学生が最も多く、他に主婦や博物館のスタッフなど延べ100名あまりがスタッフとして活動に関わっている。

子ども達に実体験を通して、感性や思考力をより豊かに育て、生活力を身につけてもらおうという欧米などの“子ども博物館”を、京都の子ども達にも体験してもらいたい、そして、より多くの人達に子ども博物館を知ってもらいたいという趣旨のもと活動がおこなわれている。そして、その主な活動となっているのが、京都市国際交流会館で毎年1回、夏休み期間にあわせて開催される短期間のイベント「京

表1：「京都子ども博物館」のこれまでの活動結果

①「95 京都子ども博物館」	
期間	: 1995年 8月22日～8月27日
会場	: 京都市国際交流会館 イベントホール、第1・第2会議室
来場者数	: 約3000人
②「96 京都子ども博物館」	
期間	: 1996年 8月20日～8月25日
会場	: 京都市国際交流会館 イベントホール、第1・第2会議室
来場者数	: 約3000人
③「97 京都子ども博物館」	
期間	: 1997年 8月25日～8月30日
会場	: 京都市国際交流会館 イベントホール、第1・第2会議室
来場者数	: 約3000人
④「97 京都子ども博物館」	
期間	: 1997年 9月13日～9月15日
会場	: 旧西陣小学校跡地

都子ども博物館」である。

このイベントも、前述した「守山子ども博物館」と同様にボランティア自らが手作りで展示を制作して、広く一般に公開しようとするものである。また、ここで採用されている展示については、「守山子ども博物館」から引き続き用いられているものと、欧米の子ども博物館の展示などを参考にして新たに考案されたものがある（表2参照）。この「京都子ども博物館」による取り組みに関しても、利用者をはじめ地元の新聞社や市民新聞などに取りあげられるなど大きな反響を呼び、期間中には毎回およそ3000人の来場者があったとされている。

「京都子ども博物館」は「守山子ども博物館」の活動を引き継いで始められた。1年目と2年目については、たしかに「守山子ども博物館」と同様に自分達で展示品を制作し、常設館として実際にあるような子ども博物館をつくりだして、それを一般に公開するといったイベントが行なわれた。しかし、3年目以降、それまでの活動の蓄積の上にたって展示

手法などにおいて独自の路線を歩み始めている。また、1997年度には地域住民の地域の活性化のためのイベントとして開催されるなど新たな展開もみせ始めている。

次章からは、まず、1997年度の地域住民との連携を明らかにしたうえで、「京都子ども博物館」で新たに採用された展示手法を含む1998年度の活動の取り組みについて紹介していきたい。

5. 地域住民との連携

前述したように「京都子ども博物館」は毎年1回、京都市国際交流会館において開催されている。しかし、表1に示すように1997年度は閉校になった旧西陣小学校を利用して2回目の開催がおこなわれた。この旧西陣小学校での「京都子ども博物館」は、地域住民のふれあい事業の一環として企画された「第2回・西陣わっしょい」のメインイベントとして開催されたものである。これは、以前、国際交流会館でおこなわれた「京都子ども博物館」へ訪れた西陣住民の要望によって実現している。

この「第2回・西陣わっしょい」は“より地域に密着した、元気のあるまちづくり”をテーマに開催され、このイベントを通じて西陣に新鮮な息吹を吹き込み西陣のまちおこしや地域の活性化につなげていきたいという願いでおこなわれたものである。また、この旧西陣小学校での「京都子ども博物館」は1999年度にも実施される予定である。このことは子ども博物館を普及するための運動が地域住民のまちおこしの活動と結び付いたという点で注目する必要がある。この一連の経緯からもわかるように、「京都子ども博物館」が単なる子どもに対する教育的な活動というだけにとどまらず、人口の流出にともない衰退してしまった地域の活性化のための一つの手段としても住民から期待され始めているということがいえる。

6. 1998年度「京都子ども博物館」の紹介

1998年に開催された「京都子ども博物館」の概要は以下に示すとおりである。

- ・期間 : 1998年8月19日 8月22日の4日間
- ・会場 : 京都市国際交流会館
(イベントホール、第1・第2会議室)

- ・会場面積：316㎡
- ・来場者数：1736人（大人592人、子ども1144人）
- ・会場見取図：図1参照

以上のように、1998年度は期間を2日間短縮しての開催ではあったが、4日間で1732人の来場者数を記録した。日別の来場者数についてはばらつきがみられ、最も少なかったのが22日の270人、最も多かったのが20日の523人であった。なお、22日の来場者が最も少なかったのは、土曜日ということもあり、地蔵盆など地域の行事と日程が重なったことが原因であると思われる。来場者としては子ども連れの家族が最も多く、そのほか周辺の児童館や保育園など団体で利用するケースもみられた。いずれの日も開場前から多くの来場者が訪れ、開場待ちの長い列ができるなど大盛況であったといえる。しかし、開催規模を考えると、特に20日の523人という来場者はやや過剰であり、運営が円滑に進まないといった場面が目についた。また、今回、調査をすることはできなかったが、ほとんどの利用者が2時間以上の長時間会場内に滞在していたものと思われる。なお、ボランティアについては「京都子ども博物館」にス

タッフとして登録されている100名あまりの中から、1日当たり20～30名が入れ替わり参加している。

次章からは、1998年度に開催されたこのイベントの具体的な内容について紹介していきたい。

7. 「京都子ども博物館」の展示手法

1997年度の「京都子ども博物館」からは一般の子ども博物館とはまったく異なった展示手法が採用されている。ここには博物館ではなく、ドイツでおこなわれている「ミニミュンヘン」⁹⁾というイベントが参考にされており、そのおおよその内容は以下のとおりである。

来場した子ども達はまず受付で市民証を受け取り、「ミニニ京都」の市民となる。それから「ハローワーク」という職業安定所で仕事を紹介してもらい、会場内に設けられたお店などで働くことにより賃金をもらう。そこで得たお金を使って別に設けられた遊びのコーナーを利用したり、お店で生産された商品を購入することができる。

ここで採用されている仕事や遊びの詳細については表2に示すとおりである。表2をみても分かるように、これらのほとんどが一般の子ども博物館や博

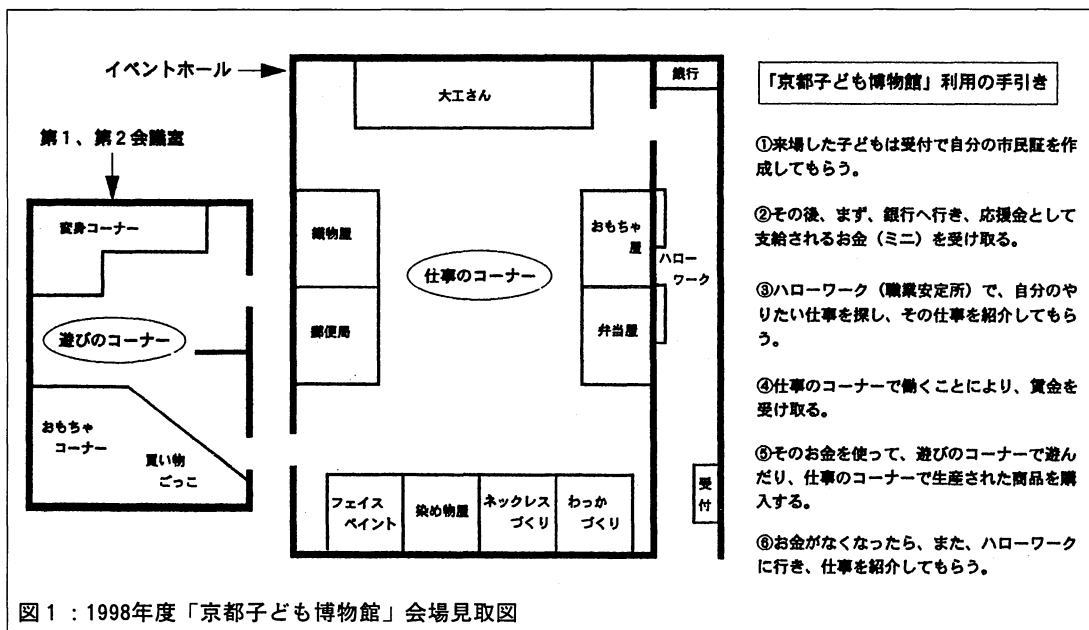


図1：1998年度「京都子ども博物館」会場見取図

表2：1998年度「京都子ども博物館」展示物詳細

(仕事のコーナー)

① ハローワーク

いわゆる職業安定所であり、子どもの年齢に応じた仕事が紹介されている。子ども達はここで自分の好きな仕事をみつけ、お金(三)を稼ぐために働きに出る。30分ごとに仕事が紹介されているので、時間になるとほとんどの子ども達がここに集まってくる。

② お弁当屋さん

紙や毛糸を使って色々なおかずを作り、お弁当を完成させる仕事である。各年齢層の子どもに平均して人気の高いコーナーで、1998年度の2番人気の展示となっている。

③ おもちゃ屋さん

世界各国の昔から伝わる庶民的なおもちゃを自分で制作する仕事である。今回はインディアンの子どものおもちゃであるトゥモロコシの皮を使った人形作りなどが行なわれた。

④ 織り物屋さん

京都の代表的な文化の一つである西陣織を体験できるコーナー。子ども用の小さな織り機と毛糸を使って、織り物を作る仕事を行なう。

⑤ 染め物屋さん

京都の代表的な文化の一つである有染を体験できるコーナー。真白い布を自分で染めて染め物を制作する仕事となっている。

⑥ 大工さん

建築士によって設計された1畳2間の木造住宅を、ボランティアの指導のもと子ども達が協力して組み立てる。その後、別の子ども達が解体屋として家を解体していく。小さい子どもには危ないので年長の子ども(8歳以上)限定の仕事となっている。

⑦ 郵便局

郵便屋さんの帽子をかぶり、カバンを持って会場内に設置されているポストからハガキを回収してくる。そして、郵便局で仕分けをし、お店などに配達していく。そのため会場内は絶えず郵便屋さんの格好をした子ども達がウロウロしている。

⑧ 銀行

銀行といってもお金の貸借りがあるわけではないが、「京都子ども博物館」を訪れた子供はここで最初に応援金として少しだけお金をもらうことができる。受付に座って、お金を渡すことが子ども達の仕事である。

⑨ わっか作り

ビーズに紐を通して小さなわっかを作る。他の職業での作業が困難な小さい子ども向けの仕事となっている。

⑩ ネックレス作り

ビーズに紐を通してネックレスを制作する仕事である。

⑪ 清掃局

会場内に落ちているゴミを拾い集めるのが、この仕事の内容となっている。1日1回終了間際に行われる。

(遊びのコーナー)

① 買い物ごっこ

様々な食品の空箱やプラスチックの果物などを利用した商品を多数陳列し、本物のレジスターを設置することによって、実際のお店のような雰囲気体験できるように工夫されている。子ども達は買い物かごをもって買い物した後、自分でレジを打つこともできる。「守山子ども博物館」から引き続き1番人気のコーナーとなっている。

② 変身コーナー

数十点にものぼる世界各国の民族衣装の中から自分の好きなものを選んで着ることができるコーナー。アメリカの子ども博物館にも設置されている人気の高いコーナーの一つである。記念撮影をしていく家族も多い。

③ おもちゃコーナー

ブロックや玉転がしなど世界中のおもちゃで遊べるコーナー。小さな子ども連れの家族には格好の休憩場所となっている。

④ フェイスペイント(メイク)

子ども達が自分の顔や手に色々なメイキャップをしていくコーナー。自分で描く場合とボランティアに描いてもらう場合がある。普通の化粧ではなく、花や動物などの絵や奇妙な模様を描く子どもがほとんどである。

⑤ 動物園

「京都子ども博物館を広げる会」代表の町田による1日2回の企画イベント。たくさんの動物のぬいぐるみやパネルを用いて動物に関するさまざまな知識をクイズなどで紹介する。

物館で展示やワークショップとして頻繁に用いられ
ており、それほど珍しいものではない。この展示手
法はそのような一般的な展示を仕事や遊びとして位
置づけることにより、各展示を一つ一つ独立させる
のではなく会場全体を一つの展示として、実際の社
会生活を再現しようとするものである。

それぞれの仕事は30分単位で区切られており、こ
の時間内は仕事を途中で終了すると賃金を受け取る
ことはできない。これに加えて、人数制限があるので
人気の職業にはなかなか就くことはできないという
こと、遊びのコーナーでどんなに遊びたいと思っ
ても、仕事をして賃金をもらわないと利用すること
ができないというところまで含めて現実の社会が疑
似体験できるように意識されている。しかし、この
ような企画者側の配慮は、“普段はわがままな子ど
もが納得してよく我慢していた”などと来場した大
人達からも評価されている反面、子どもが自由に遊
べないと最も苦情の多いところでもあった。今後は
来場者、特に小さな子ども連れの大人に対して、こ
のシステムに関する十分な理解ができるような説明
をおこなうことが必要になってくると思われる。

この展示手法では子ども達は展示を体験するた
めにはいったん仕事を覚えなければならないので、自
分から意欲的にボランティアから仕事を教わろうと
し、必然的にボランティアと子ども達がふれあう機
会も多くなっている。また、ここには、まだ慣れて
いないボランティアにとっても、全ての子ども達に
仕事を教えるという明確な役割を与えられること
によって、自分から積極的に子どもに働きかけられ
るという効果もみられた。一方で、この手法では、子
ども達を管理しすぎるのではないかという意見も聞
かれたが、期間中に京都子ども博物館を訪れた大人
たちの評価は後述するとおりであり、こうした疑念
はみられなかった。

しかし、この展示手法は、子ども達に仕事の内容
を教えるために、各展示に複数名のボランティアス
タッフが関わらなければならず、多くのスタッフを
必要とするので、その人員の確保が困難であること。
一定時間子ども達を拘束するため、絶えず子どもの
興味を引き付け続けなければならず、スタッフの技
量の差が子どもの満足度に大きく影響してしまうと
いうこと。最初から利用者数が限られてしまうので、

混雑時には対応しきれなくなるなど不利な点も
多い手法でもある。

8.「京都子ども博物館」の利用者（子ども）像

ここまでは、「京都子ども博物館」の例から、日
本における住民の子ども博物館運動の取り組みにつ
いて紹介してきた。では、いったいこれらの活動に
どのような子ども達が参加し、どのように評価され
ているのか。そこで、ここからは、1998年度の「京
都子ども博物館」における調査結果をもとに、その
利用者像について明らかにしていきたい。

(1)来場した子どもの居住地

来場者の居住地は、65%が京都市内であり、京都
市以外の京都府下が12%、残り23%が他府県とな
っている。また、来館までの所要時間（図2）をみ
てみると、全体の62%が30分以上となっており、こ
のことから子どもが歩いてこのような距離に住む
周辺の住民だけでなく、幅広い地域に来場者の居住
地が分布していることがわかる。

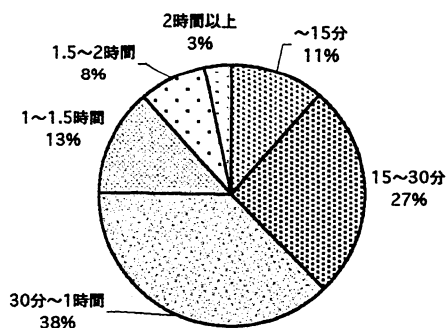


図2：来場までの所要時間

(2)来場した子どもの年齢層

図3に示すように、5才から小学校低学年までの
子どもの来場が多く、乳幼児や小学校高学年以上の
児童の来場はやや少なくなっている。来場した子ど
もの平均年齢は6.4才であった。また、男女比は4：
6となっており、女子の利用のほうが多くなってい
る。男子の平均年齢は6.2才、女子の平均年齢は6.7
才であった。

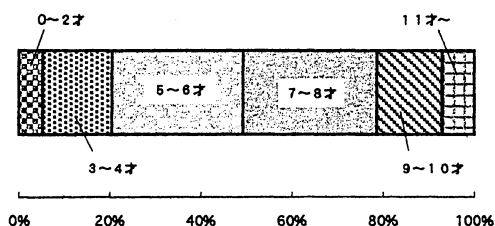


図3：利用者（子ども）の年齢層

(3)来場した子どもの同伴者

図4に示すように、母親と一緒に来場してきた子供が全体の83%となっている。つまり、来場した子どもの大半は大人に連れられて子ども博物館まで訪れているということがいえる。また、この数値は利用者の年齢が低くなるほど高い数値を示している。しかし、このように多くの子ども達が大人の同伴で来ているにもかかわらず、これまでの「京都子ども博物館」の活動においては、この同伴の大人に対する配慮はあまりなされてこなかった。アンケートに寄せられた意見の中にも“子どもと一緒に来た大人は暇だった”という感想がいくつかみられたことから、今後は子どもと一緒にいかに大人にも楽しんでもらうか、そのような活動の在り方が期待されているものと思われる。

(4)「京都子ども博物館」を知ったきっかけ

「京都子ども博物館」を知ったきっかけを見ると、「友人・知人による口コミ」が全体の46%と最も多く、ついで「新聞」が24%、「チラシを見て」が16%となっている。また、この「友人・知人による口コミ」と答えた利用者の属性を見てみると、今回はじめて利用した初心者と3～6才の子どもにおいて特に高い数値を示しており、それぞれ50%を超えていることが分かった。この結果からも、子どもを対象としたイベントにおいてより多くの来場者を獲得するためには「友人・知人による口コミ」が大きな影響力をもっているということが分かる。

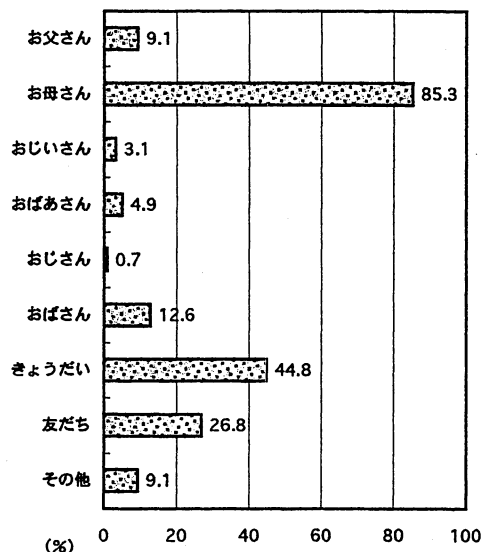


図4：来場した子どもの同伴者（複数回答）

表3：開催を知ったきっかけ

1. 「友人・知人による口コミ」	133名 (46%)
2. 「新聞」	70名 (24%)
3. 「チラシを見て」	46名 (16%)
4. 「その他」	20名 (7%)
5. 「通りすがりに」	15名 (5%)
6. 「ラジオで聞いて」	6名 (2%)

(5)過去の「京都子ども博物館」への来場経験

表4に示すように、来場した子どもの40%は過去の「京都子ども博物館」への来場経験をもっていることがわかる。また、初めて来館したと答えた残りの60%の来場者に関しても、1998年度の子ども博物館期間中に複数回来場したケースも考えられるので、実際のリピーター率は表4における数値よりもやや高くなってくるものと思われる。いずれにしても、第1回目の開催から1998年度で4年目を迎えているとはいえ、短期間のイベントでのリピーター率としてはかなり高い数値を示しているといえる。また、

初心者とりピーターの属性を比較してみると、居住地域が近くなるほどりピーター率が高くなる傾向がみられ、年齢や性別などよりも利用者の居住地域や来場までの所要時間が大きく影響していることがわかった。

表4：過去の「京都子ども博物館」への来場経験

1. 「はじめて利用した」	177名 (60%)
2. 「利用したことがある」	109名 (40%)
・ 1995年の開催に来た	27名 (9%)
・ 1996年の開催に来た	62名 (21%)
・ 1997年の開催に来た	96名 (33%)
・ 1997年の西陣での開催	22名 (7%)

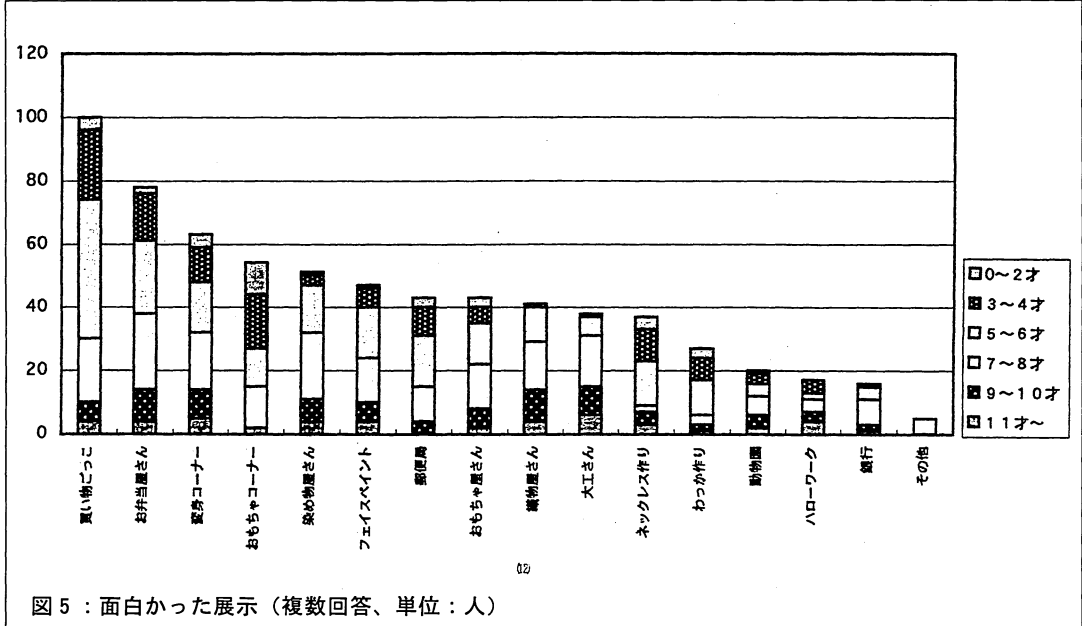
(6)展示の評価

各展示の評価については、同じものでも年齢層によって異なるが、全体的にみると「買い物ごっこ」や「変身コーナー」、「フェイスペイント」といった諸外国の子ども博物館の代表的な展示として、日本でもよく紹介されている展示に対する評価はここでも高くなっている（図5参照）。

利用者の男女別の人気展示を比較してみると、特に大きな差がみられるのが「変身コーナー」と「おもちゃコーナー」であり、「変身コーナー」は女子、「おもちゃコーナー」は男子の支持率が高かった。次に年齢別の人気展示を比較してみると、0～4才の子どもには「おもちゃコーナー」、5～8才の子どもには「買い物ごっこ」、9才以上の子どもには「お弁当屋さん」や「大工さん」などの展示が人気を集めている。また、「変身コーナー」や「お弁当屋さん」は各年齢層に対して高い支持率を示していることがわかった。

(7)「京都子ども博物館」の満足度

期間中に「京都子ども博物館」を利用した子どもの満足度は図6の通りである。「すごく良かった」「良かった」を合わせると全体の83%となっており、利用者に高い評価を受けていることがわかる。また、この満足度を利用者の属性別に比較してみると、9才以上の子どもには若干低くなり、男子よりも女子、初心者よりもりピーターの方が高くなっていることがわかった。



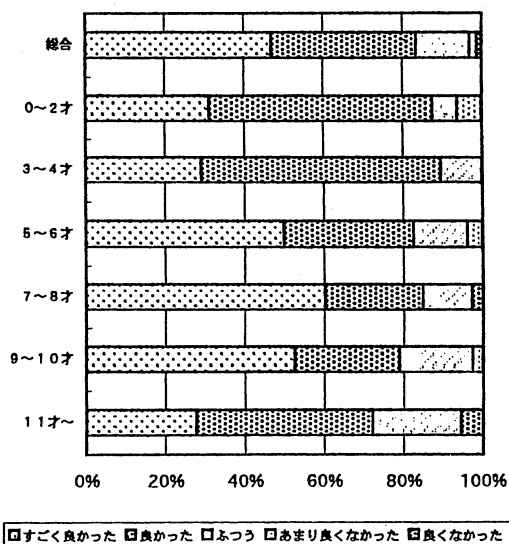


図6：「京都子ども博物館」の感想

9. 来場者（大人）による活動の評価

「京都子ども博物館」を訪問した大人に対しては、この活動をどのように評価しているのか、また、今後どのような活動を望んでいるのかなどについてアンケートを行なった。その結果は以下に示すとおりである。

(1)来場の動機

期間中、「京都子ども博物館」を訪問した大人達は、どのような動機で来場を決定しているのか。表5をみると、「子どもが遊べるよい企画であると思ったから」という動機が全体の69%と最も多く、ついで「自分自身が興味があったから」が多くなっている。「子どもにせがまれた」が動機と答えたのは全体の7%であった。この結果から、来館の決定に対しては大人の意見が大きく影響しているということ。また、子どもを連れて遊びに行く感覚で気軽に来場を決定しているということがわかる。

(2)目的の達成度

「京都子ども博物館」では“子どもが遊びの中から自然に学べるように”がその活動の目的とされている。図7は、期間中に来館した大人の視点から子

ども達を見て、そのような目的がどの程度達成されているかについてアンケートをおこなった結果である。「十分達成できている」「ある程度達成できている」という意見をあわせると全体の91%の大人が子ども達は遊びの中から何か学びとっていると感じており、教育的にこの活動が高く評価されていることがわかった。

また「達成できている」と答えた理由を尋ねた項目では“いきいきと仕事をしていた”“自分から意欲的に動いていた”“すごく楽しんでいた”など子ども達が楽しみながら積極的に遊び回っている姿から、そのように感じたという意見が多かった。一方、「達成できていない」と感じた理由としては、“小さな子どもには難しすぎる”“人が多すぎて子どもがなかなか仕事をもらえなかった”“仕事の種類が少ない”など、展示の教育的意図の否定というよりも内容の充実を期待する回答が寄せられている。

表5：来場の動機（大人）

1. 「子どもが遊べる良い企画だと思ったから」	175名 (69%)
2. 「自分自身の興味で」	90名 (35%)
3. 「学習・研究のために」	20名 (8%)
4. 「子どもにせがまれたから」	18名 (7%)
5. 「特に動機はない」	15名 (6%)
6. 「その他」	6名 (2%)

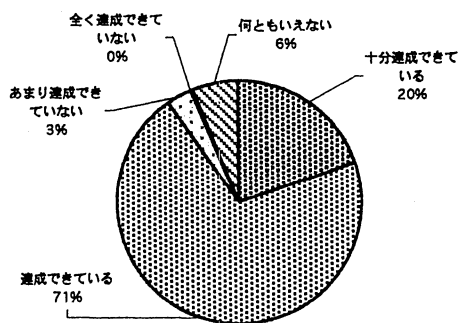


図7：目的の達成度の評価

(3)今後の活動に期待すること

この項目に関しては19日から21日までは自由回答で来場者の意見を記入してもらった。最終日である22日のアンケートではこの項目のみ変更し、前日までに寄せられた意見の中から特に多かったものを10項目ピックアップして3つまでの複数回答をしてもらっている。最終日の回収結果は配布120部、回収51部（回収率42.5%）であった。図8がその結果となっている。

図8が示すように「会場を広げる」「開催地域を広げる」「開催数を増やす」といった現在の活動規模をもっと広げることにに対する期待が最も多くなっている。それに「催しの仕組みを分かり易くする」「展示内容を充実させる」といった活動の内容そのものの充実を望む意見が次いでいる。一方、この活動の発起当初からの目的である常設化を期待する意見は必ずしも多くはなかった。しかし、このことには今回の調査結果をみる限り「京都子ども博物館」の活動そのものが高く評価しているために、常設化してしまうことよりも、むしろ、活動そのものを発展させていって欲しいという来場者の判断が関連しているように思われる。

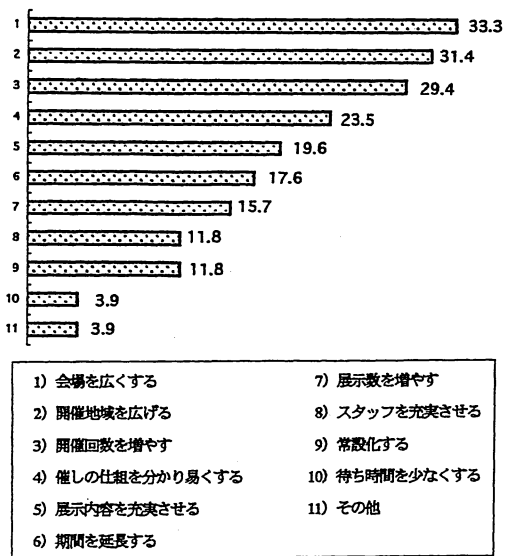


図8：今後の活動に期待すること（%）

10. むすび

本稿では、「京都子ども博物館」の活動について紹介してきた。しかし、近畿圏における子ども博物館に関する住民の運動はこれだけではない。1998年度は兵庫県などでも、この活動と同様のイベントが開催された。また、京都市でも、他のボランティアグループによって、閉校になった小学校の校舎を利用しての“子ども博物館”のイベントが行なわれている。また、これらの活動については1999年度にも引き続きおこなわれる予定である。このように住民による子ども博物館運動は次第に広がりを見せつつあるといえる。そして、今回の調査結果をみてもわかるように、これら住民による子ども博物館づくりの運動は来場者からも高い評価を受けており、また、西陣で開催された「京都子ども博物館」に代表されるように住民の地域活性化のための一つの手段としても期待されてきている。

なぜ、このようにボランティアグループによる子ども博物館運動が地域の住民によって高い支持を受け、なおかつ運動としても広がりを見せつつあるのか。このことは「京都子ども博物館を広げる会」代表の町田の“子どものためになんて言ってるけど、ほんとに自分が一番楽しんでいますね”という言葉に象徴されているように思う。利用者だけでなく、自分達も楽しもうとすることによって、企画する側の人間にも意欲が生まれてくる。これはボランティアとしては当然の姿勢であるのかもしれない。しかし、このような主催者側の活動に対する姿勢が自然と利用者にも伝わり、今回の調査にみられるような高い評価につながっているのではないだろうか。

これら住民による手作りの子どもの博物館の成功は、どうしてもハイテク展示の導入などハード面にばかり目がいきがちな博物館の現状に対して多くの問題を提起しているように思う。利用者に何か伝えるためには必ずしも高額な展示だけが必要なのではない。たとえば手作りであったとしても、スタッフの心がけや工夫次第で多くのことを利用者に伝えることができ、なおかつ、より多くの来館者を博物館が獲得することができる。

次稿では、これらのことについて更に明らかにするために、今回は取り上げることのできなかった「京都子ども博物館」ボランティアグループの属性、活

動に取り組んだ動機や評価、今後の課題など、ボランティアの視点からみた子ども博物館運動について紹介していきたい。

謝 辞

本稿に関する調査を行なう際には、「京都子ども博物館を広げる会」代表の町田弘法氏をはじめボランティアグループの皆様のご協力をいただきました。厚く御礼申し上げます。

【註】

- (1)滋賀県立琵琶湖博物館「博物館ができるまで」中村太古社、1997
- (2)大阪市教育振興公社「こどものための博物館 キッズプラザ大阪」小学館、1997
- (3)諸澤正道「開かれた博物館をめざして」科学博物館後援会、1991
- (4)大月浩子「わくわくミュージアム」婦人生活社、1994
- (5)上野勝代・高瀬交子・宇賀万奇子・佐々木博子「日本における子ども博物館の試みと参加者像に関する研究ー守山市における事例よりー」日本建築学会近畿支部研究報告集、第30号・計画系、1990年5月、建築計画5047、pp397-400
- (6)上野勝代・高瀬交子・高梨薫「日本における子ども博物館の試みと参加者像に関する研究Ⅱー守山市における事例よりー」日本建築学会近畿支

部研究報告集、第31号・計画系、1991年5月、建築計画5003、pp229-232

- (7)染川香澄・西川豊子・増山均「子ども博物館から広がる世界」たかの書房、1993、pp39-58
- (8)「シリーズひと 京都子ども博物館を広げる会・町田弘法さん」財団法人京都市国際交流協会ニュース『AKUSHU 1998夏号』、1998、pp4-5
- (9)「ミニミュンヘン」の内容に関しては内藤裕子¹⁰⁾が詳しく紹介している。「ミニミュンヘン」とはミュンヘンのオリンピックパークで2年に1度夏休みにあわせて子ども達のために開催されている催しである。会場内にはたくさんのお店、銀行、工場などが設けられ、遊びの町「ミニミュンヘン」が形成されている。ここではミュンヘンの町のさまざまな職業の体験を含め、疑似的な社会生活そのものを体験できる。ここを訪れた子ども達はまず市民証を受け取り「ミニミュンヘン」の市民となる。そして職業紹介所で仕事を紹介してもらい、そこで働くことによって賃金をもらう。さらにここでは政治もあり、子ども達の中から選挙で市長を決めさまざまな政治を行なうこともできる。まさしく現実の町ミュンヘンの縮図であり、子ども達は現実の町の職業や政治などについて遊びながら学ぶことができる。
- (10)内藤裕子「遊びの都市ーミニミュンヘン」『ランドスケープデザイン』No. 6、マルモ出版、pp70-73